I はじめに

Introduction

最初の鳥取県版のレッドデータブックである「レッドデータブックとっとり（動物編，植物編）」が2002年に発行されてから，そろそろ10年になります。この初版のレッドデータブックは幸い好評をもって迎えられ，鳥取県の希少野生動植物の保護に大いに活用されました。

レッドデータブックがその役割をもっともよく発揮していると感じられるのは，第一に，高速道路建設や河川改修などの工事にともなう環境アセスメントの場面です。たとえば，私は中海と島根県の宍道湖をつなぐ大橋川の拡幅工事の手法を検討する委員会などで，その工事にともなう環境アセスメントの調査報告などを診る機会がありましたが，そこでも鳥取県側の動植物の基礎資料としてもっとも重視されていたのが，本書でした。そのような調査では，まず，レッドリスト掲載種の中で，工事予定地域とその周囲に生息・生育する可能性のある生物種を抜き出し，そのうえで当該地域内でのそれらの種の生息・生育状況を実地調査で把握します。つづいてレッドリスト掲載種で実地調査中に新たに生息・生育が確認されたという種も加えて，工事がそれらの動植物種の生息・生育に影響するかどうか，また，影響するなら，それをどのように軽減・回避するか，を検討するということを行ないます。日本の生物多様性条約批准（1993年）や環境影響評価法制定（1999年）などの流れもあり，絶滅危惧種の保護や，生物多様性を維持することの重要性への理解は，最近ではかなり広く浸透し，アセスメントの過程でレッドリスト掲載種が出現すると，事業者側でもその保全策を真摯に検討していただけるようになってきています。その意味でもレッドリスト掲載種の選定には慎重さが求められます。

もう一つ，間接的ながら「レッドデータブックとっとり」が重要な役割を担ったと私が思うのが，特定希少野生動植物の保護活動です。鳥取県では，2002年にレッドデータブックを作成したおりに，「鳥取県希少野生動植物の保護に関する条例」を制定し，特定希少野生動植物として指定した動物８種，植物33種について保護管理計画をたてました。また，その計画にもとづき，民間のNPOなどの協力を得ながらそれらの生育地・生息地の保全に取り組んできました。この条例は，特定種を指定するだけに終わらず，補助金なども計上して，それらの保護に積極的に取り組むというところに特徴があり，当時，先進的な取り組みとして，他県からも注目されました。ブッポウソウ，サクラソウ，ウスイロヒョウモンモドキ，コガタノゲンゴロウなどのように保護活動が有効に成果をあげていると思われる例も多く，とくにコガタノゲンゴロウはいずれは特定希少野生動植物の指定の解除を検討できるかもしれないほど生息状況が好転しつつあるのではないかという話も聞いています。これらの取り組みについての県と関係者のご努力に敬意と謝意を表したいと思います。

また，県版レッドデータブック出版の副次的効果として，本書の掲載種への注目が高まり，生息・生育情報が以前とは比較にならないほど多く寄せられるようになってきました。また，それらの情報を共有するために，報文として生息データをきちんと記録にとどめるという習慣も根づきつつあります。鳥取県生物学会が発行している雑誌「山陰自然史研究」（2003年から発行。前身は「鳥取生物」）や，鳥取県立博物館研究報告（2005年発行の第42号から現在のA4判にリニューアル）などをご覧いただくと，前回のレッドデータブック発行後に多くの方がこのような作業に関わり記録の蓄積に努力されてきていることをよく分かっていただけると思います。

さて，前回のレッドデータブック発行ののち，環境省版のレッドリストは第3版（2006/2007）が公表され，鳥取県版のレッドデータブックの改訂の要望も高まっておりました。本書はそれを受けて作成された改訂版です。私は前回も編集のお手伝いをしましたが，まだ10年もたたないのに，今回の選定や本の編集作業ではあらゆることが前回とは様変わりしており，さまざまな苦労がありました。うち，最大のものは私が勤務する大学をとりまく環境の変化で，この作業に割ける時間が前回担当時と比べて極端に減少していたことを甘く見すぎていたため，編集作業にさまざまな遅れを生じ，鳥取県の担当課および，今回の改訂作業に参加・協力いただいたみなさまには大変ご迷惑とご心配をおかけしました。このことをまずお詫びします。

反省点も含め，今回の作業をとおして感じたことは多々ありますが，レッドリスト選定（あるいはレッドデータブックの発行）の社会的重要度の高さのわりには，このような選定作業にかかわることのできる人材の後継者不足も重大な問題であることを改めて感じました。分類群によっては，その後，県内で調査が下火になっていて，十分な情報が集積されていないというものが少なくありませんでした。ちまたでは絶滅危惧種よりも，地域生物相の実態解明への貢献に十分な生物同定の知識を持つ人が先に絶滅するのではないかという，真実味がありすぎて笑えない冗談もあるほどです。かつて，このような人材をもっとも多く輩出していたのは県内の学校現場であり、関係機関のみなさまのご理解とご協力が不可欠と考えているところです。

前回の初版と同様に，この「レッドデータブックとっとり改訂版」を，鳥取県の野生動植物と生物多様性の保全のためのさまざまな活動・取り組みに，各方面で大いに活用していただければ幸いです。

鳥取県生物学会 会長　鶴崎 展巨